

# 井辺遺跡 第7次発掘調査概報

2006

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

# 序 文

和歌山市は、紀淡海峡を望む和歌山県の北西端に位置し、本市の中央を西流する紀ノ川の恵みを受けた和歌山平野を中心とした地域であります。この肥沃な平野部には、古くから様々な人々が生活を営み、市域には約400ヶ所を数える多くの遺跡が残されています。

そのなかでも今回発掘調査を行いました井辺遺跡は、和歌山市内に所在する遺跡のうち最も広範囲に広がるもので、これまでの調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて営まれていた集落(ムラ)にかかわる遺構や遺物が見つかっています。

調査の結果、弥生時代中期の土坑1基や後期の竪穴住居1棟及び、古墳時代初頭の竪穴住居4棟など集落の中心部を示すとみられる遺構のほかそれらに伴う遺物が見つかりました。これらの遺構や遺物は、井辺遺跡の集落内部の様相を知る上で貴重な資料になるものと言えます。

ここに報告する調査成果が、広く私たちの郷土に関する歴史認識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成18年3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

理事長 井 邊 祐 二

# 例 言

1. 本書は、和歌山市井辺112・113番地において計画されたマンション建設に先立つ発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、三宅玉代氏の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託を受け、和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、対象面積108㎡を2005年4月14日から同年5月12日までの期間で実施した。
3. 発掘調査及び報告書刊行に係わる調査体制は下記のとおりである。

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理 事 長	井 邊 祐 二
事 務 局 長	橋 本 義 則
総 務 課 長	池 田 昌 弘
総 務 課 班 長	小 栗 孝 昭
学 芸 員	藤 藪 勝 則
事 務 主 任	山 口 美 二

4. 本概報掲載の遺跡・遺構及び遺物の写真撮影は発掘調査担当の藤藪が行った。
5. 本書の執筆及び編集は、発掘調査担当者が行った。
6. 写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。
7. 現地調査に際し、土地所有者をはじめ地域住民の方々には寛大なご理解・ご協力を賜り、また概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝申し上げます。

# 本文目次

1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の方法と経過	4
(1) 調査の方法	4
(2) 調査の概要	4
4. 遺構	5
(1) 弥生時代の遺構	5
(2) 弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構	7
(3) 古墳時代の遺構	8
5. 遺物	10
(1) 弥生時代の土器	10
(2) 弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器	11
(3) 古墳時代前期の土器	12
(4) 土製品、石器	13
6. まとめ	13
報告書抄録	14

# 図版目次

- 図版 1 調査地遠景（北から）、調査前の状況（西から）
- 図版 2 調査区全景（西から）、SK-8（南から）
- 図版 3 SB-1b（南東から）、SB-1a（西から）
- 図版 4 SK-17・18土層堆積状況（北から）、SK-14土層堆積状況（南から）
- 図版 5 SD-2（北から）、SD-2土層堆積状況（北から）
- 図版 6 SB-3（南から）、SB-3土層堆積状況（南東から）
- 図版 7 SB-5（西から）、SB-5（北から）
- 図版 8 SB-2（北から）、SK-5（西から）
- 図版 9 SD-1・8（南西から）、SD-1・8土層堆積状況（北から）
- 図版10 調査区南壁土層堆積状況（北から）、調査区北壁土層堆積状況（南から）
- 図版11 SD-2・SK-8・P-11・SX-1出土土器
- 図版12 SD-1・SK-3・P-11出土土器、土製品、石器

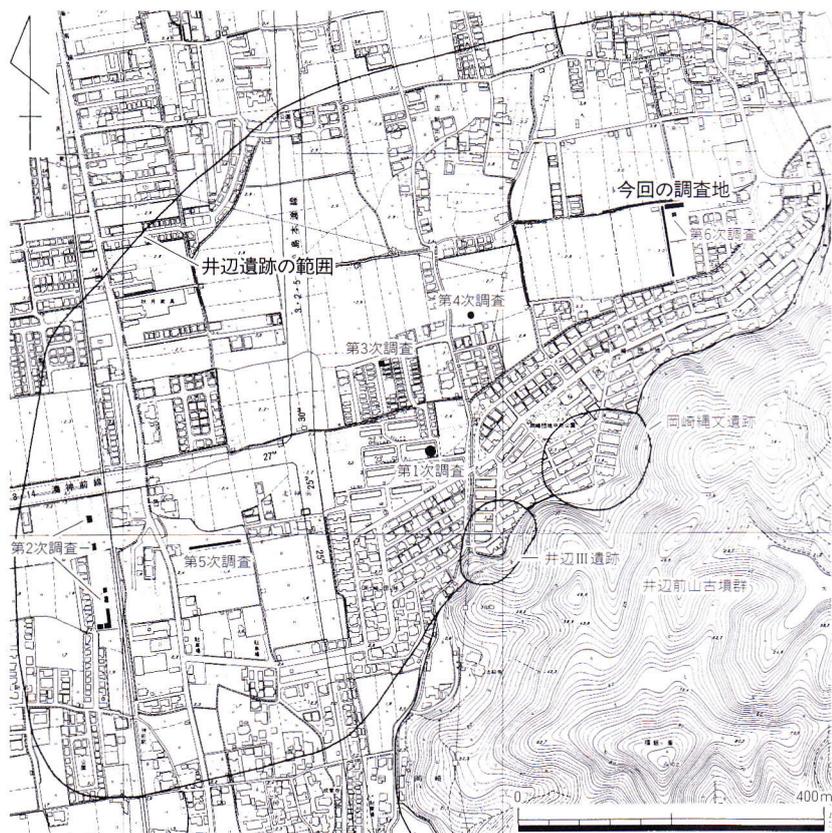
## 1. 調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市井辺112・113番地においてマンションが建設されることになり、この建設場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である井辺遺跡(遺跡番号308)の範囲内であったため、第7次調査として発掘調査を実施することになった(第1図)。

井辺遺跡では、これまでに6次を数える発掘調査が行われている。そのなかで第1次調査は、昭和34(1964)年に和歌山市教育委員会の委託を受けて関西大学考古学研究室が遺跡の中央部において行ったもので、東西方向に約4mの間隔で2列に並行してのびる弥生時代後期末の土器列と古墳時代初頭の井戸1基が検出されている。また平成8年と平成10年には、和歌山市教育委員会が遺跡の中心部において第3・4次調査を行っている。第3次調査では古墳時代初頭の土坑3基を検出しており、また第4次調査では同じく古墳時代初頭の南北約3.5m、東西4m以上、深さ約30cmを測る土坑などが検出されている。これらの調査結果から、井辺遺跡の集落が盛行する時期は古墳時代初頭頃と考えられている。さらに平成17年には当財団によって第5・6次調査が行われている。そのうち第5次調査は、遺跡の南西部において行ったもので、古墳時代の土坑5基や溝5条などのほか鎌倉時代の溝2条を検出している。また第6次調査は、遺跡の北東部において行ったもので、弥生時代後期の竪穴住居1棟や井戸1基のほか古墳時代初頭の竪穴住居3棟などを検出している。これらの竪穴住居など居住を示す遺構群は井辺遺跡では初めて確認されたものであり、井辺集落の中心部が遺跡範囲の北東部に位置する可能性とその存続時期を示すものとして注目される。

今回の第7次調査は、調査対象地が第6次調査地と同地内に位置し、また調査区が第6次調査区の北端部に近接するものである。よって、第6次調査の調査成果から判断して、調査においては弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居をはじめとする遺構が多数検出される可能性が考えられた。

調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施したものである。また現地における調査期間は、平成16年4月14日から同年5月12日までの約1ヶ月間を要した。



第1図 調査位置図

## 2. 位置と環境

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び紀の川市に、南は海南市に接し西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原を源とする紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、度重なる流路方向の変化により運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。和歌山平野は、紀ノ川と並行して連なる龍門山系の岩橋丘陵西端を起点として広がり始め、この岩橋丘陵の西麓は紀ノ川南岸でも屈指の遺跡密集地帯である。井辺遺跡(1)は、岩橋丘陵西麓のなかでも福飯ヶ峰を主峰とする独立丘陵を背後に背負い、北西に開けた標高3 m前後を測る好適地に立地する(第2図)。

周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡では北方約1 kmの花山丘陵西裾部に国の史跡として指定されている鳴神貝塚(19)がある。鳴神貝塚では、縄文時代中期から晩期の土器のほか弥生時代前期の土器も出土し、土坑墓や甕棺が検出されている。そのうち縄文時代晩期の土坑墓からは、猿の僂骨を用いた耳栓などの装身具とともに、上下の門歯を抜歯したシャーマンと考えられる若い女性の伸展葬人骨が見つまっている。また当遺跡の南東部、岡崎団地付近に所在する岡崎縄文遺跡(2)は、昭和39(1964)年に関西大学考古学研究室によって発掘調査が行われている。調査は、A～H・J～N・P区の合計14ヶ所のトレンチ及びグリットを設け行われ、縄文時代の遺物包含層や貝層が確認されている。遺物には、縄文時代後期中頃から晩期までの縄文土器のほか石鏃や石斧をはじめ石錘などが出土している。

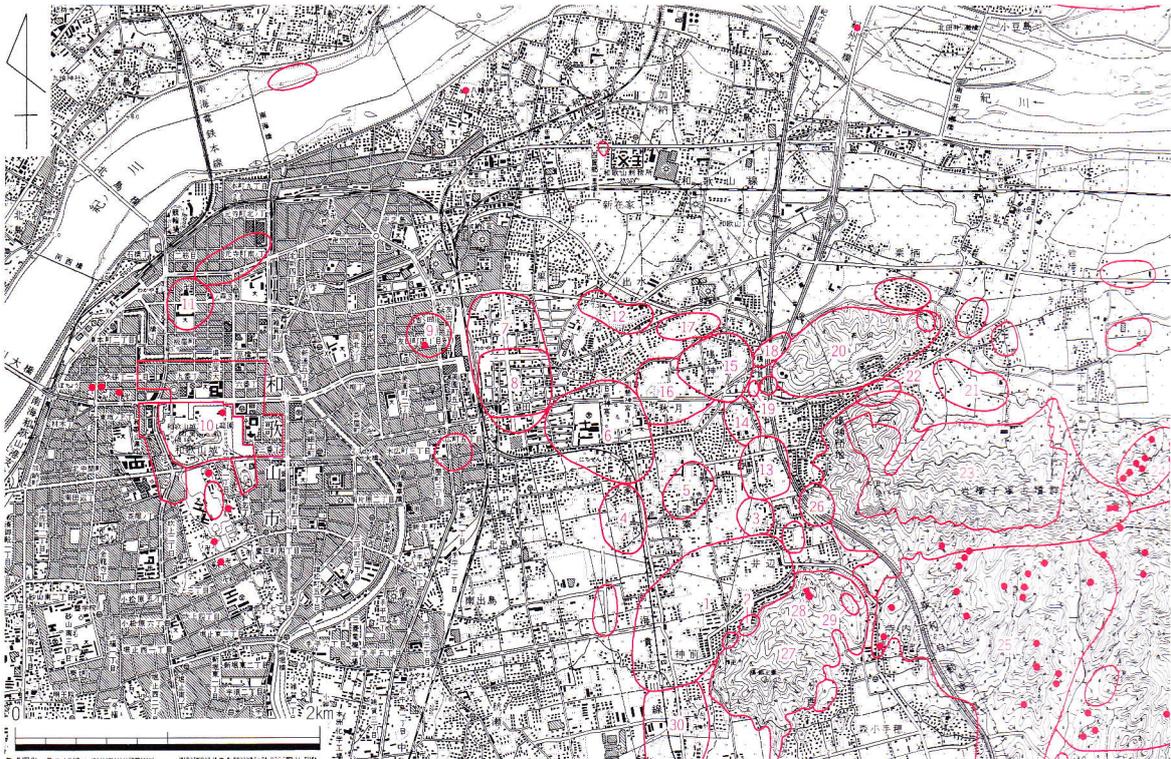
次に弥生時代の遺跡には、当遺跡やその南側に隣接する神前遺跡(30)があり、また北西約2 kmに所在するJR和歌山駅の東側平野部には、標高4 m前後を測る微高地上に秋月遺跡(6)や太田・黒田遺跡(7)などが立地している。太田・黒田遺跡では、弥生時代前期末の環濠とその内側に前期から中期の竪穴住居や井戸をはじめ土坑や溝がみられるほか、遺跡の西側縁辺部では3時期にわたる水田と小畦畔など生産域にかかわる遺構も確認されている。また遺物では、直柄広鋤や一本平鋤などの木製農耕具をはじめ銅鐸・銅鏃などの金属器、さらに絵画土器(鹿)を含む多量の弥生土器が出土している。秋月遺跡では、弥生時代前期の石器製作にかかわる土坑のほか、遺跡の南東部を北東から南西方向に流れる自然流路やこの流路が埋没した後には同じ方向性をもつ弥生時代中期の溝が掘削されている。さらに神前遺跡では、弥生時代前期の土坑や前期末から中期初頭のものともみられる水田と小畦畔のほか、弥生時代中期前葉の溝や後期の溝が検出されている。

紀ノ川南岸の古墳時代集落は、秋月遺跡、鳴神遺跡群(13～17)、音浦遺跡(18)、友田町遺跡(9)などのように弥生時代と同じく岩橋丘陵西麓の微高地を中心に集中して立地する。まず秋月遺跡では、庄内式併行期の方形竪穴住居が3棟重複して検出されており、そのうちのひとつは一辺7.8 mを測る大型住居である。当該期の大型竪穴住居は、紀ノ川北岸の府中遺跡や吉田遺跡でも検出されており、古墳時代初頭の集落単位と群構造を把握する上で一つの単位を示す資料と考えられる。また鳴神遺跡群では、竪穴住居や掘立柱建物のほかに古墳時代前期以降の用水路と考えられる溝などが確認されており、鳴神V遺跡(16)では微低地部に小区画水田が8単位検出されている。

古墳については、秋月遺跡において布留式併行期の前方後円墳がみられるほか、鳴神V遺跡では微高地上に古墳時代前期から後期の方墳群が築造されている。また当遺跡を取りまく丘陵上に立地

する花山古墳群(20)や岩橋千塚古墳群(23)及び井辺前山古墳群(27)は、古墳時代前期から後期の約800基にもおよぶ広義の岩橋千塚古墳群に属している。そのうち、岩橋千塚古墳群内にある大日山35号墳や当遺跡の背後に展開する井辺前山古墳群内の井辺八幡山古墳(28)からは、武人や力士のほか鳥や馬、さらに家や盾などを模した形象埴輪が多数出土している。特に大日山35号墳の東側の造出しからは、全国的にも類例がみられない飛翔する鳥を模した形象埴輪が出土している。

歴史時代になると、鳴神V遺跡では陶硯、緑釉・灰釉陶器、初期貿易陶磁器など奈良時代から平安時代の官衙的な施設の存在を窺わせる遺物が出土し、太田・黒田遺跡でも奈良時代の井戸から斎串や和同開珎42枚、万年通寶4枚など井戸の祭祀にかかわる遺物のほか、平安時代の須恵器円面硯などが出土している。また鎌倉時代では、太田・黒田遺跡において土師器の皿・台付皿・盤、瓦器などが共伴する井戸や土坑のほか、神前遺跡では曲物桶を井筒として据えた石組井戸などが検出されている。さらに室町時代では、同じく神前遺跡において備前播鉢、灰釉折縁皿、胎土目唐津碗、中国製染付皿などを出土した室町時代末期の溝などが検出されている。そのほか太田・黒田遺跡の南半部は、天正13(1585)年、豊臣秀吉の紀州攻めの際に水攻めが行われたと推定されている太田城跡(8)であり、遺跡の北東約800mに残る太田城水攻め堤跡(12)は、水攻め時の堤が残存したものと考えられている。江戸時代の遺跡では、史跡和歌山城とその城下町である和歌山城跡(10)や鷺ノ森遺跡(11)などがある。特に和歌山城下町の調査では、紀州藩家老水野家屋敷に相当する礎石建物や石組の区画溝など4時期にわたる遺構が検出されている。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	井辺遺跡	弥生～古墳	7	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	13	鳴神II遺跡	弥生～平安	19	鳴神貝塚	縄文～弥生	25	寺内古墳群	古墳
2	岡崎縄文遺跡	縄文	8	太田城跡	安土・桃山	14	鳴神III遺跡	弥生～平安	20	花山古墳群	古墳	26	大日山I遺跡	古墳～奈良
3	井辺II遺跡	弥生～古墳	9	友田町遺跡	弥生～平安	15	鳴神IV遺跡	弥生～江戸	21	岩橋II遺跡	古墳～室町	27	井辺前山古墳群	古墳
4	津奈遺跡	弥生	10	和歌山城跡	江戸	16	鳴神V遺跡	弥生～鎌倉	22	岩橋III遺跡	古墳	28	井辺八幡山古墳	古墳
5	津奈II遺跡	古墳～室町	11	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸	17	鳴神VI遺跡	弥生～江戸	23	岩橋千塚古墳群	古墳	29	森小手穂埴輪窯跡	古墳
6	秋月遺跡	弥生～江戸	12	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	18	音浦遺跡	古墳	24	和佐古墳群	古墳	30	神前遺跡	弥生～江戸

第2図 井辺遺跡周辺の遺跡分布図

### 3. 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

調査地の現況は、造成された宅地である(図版1)。調査は、東西約30m、南北約3.6mの東西に長い調査区を設定し行った(第3図)。

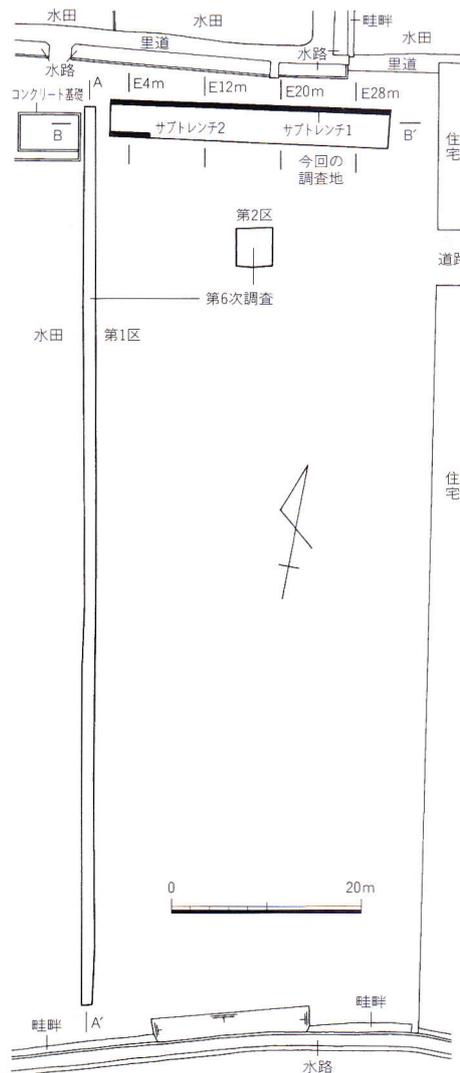
重機による掘削は、調査区の全面にある碎石と宅地造成に伴う造成土及び現代の耕作土(第1・2層)までとし、第3層以下の遺物包含層と遺構の調査については人力掘削によって行った。溝や土坑などの遺構掘削には、土層堆積観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け、2層以上の堆積がみられるものは写真撮影及び土層断面実測による記録保存を行った。また、排水と下層調査のため調査区の北・南壁際に幅30cmのサブトレンチ1・2を設定し掘削を行った。土層の色調や土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

遺構平面図などの図面による記録は、調査地の周辺に国土座標(日本測地系)の基準点が存在しないため、第6次調査第1区の中軸線(A-A')とそれに直交するライン(B-B')の交点(仮原点0)を基準とし、東へ4mごとに測量杭を設置して遺構実測を行った。遺構全体平面図及び壁面土層堆積状況図については、1/20の縮尺を用い手実測で行った。また遺物の取り上げについては、仮原点から4mごとに設置した測量杭を基準として取り上げた。さらに遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

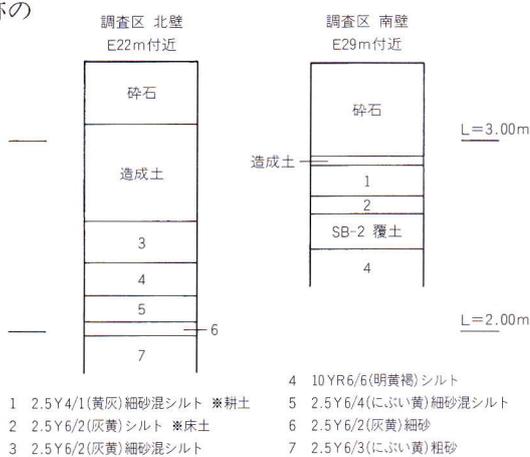
#### (2) 調査の概要

調査地の基本層序については、第4図に示したとおりである(図版10)。まず調査区の全面には、厚さ50~80cmを測る碎石及び造成土がみとめられる。調査区の北・南壁面を観察した結果、この造成土は調査区の大部分において遺構検出面(第4層上面)までおよんでいることを確認した。これは現代の耕作土である第1・2層やその下層に堆積する第3層の大部分が、宅

地造成に伴う地盤改良などの改変により除去されている可能性を示すものである。よって今回の調査では第4層上面が遺構検出面となるが、調査区南東隅部では第2層下面において遺構覆土がみられることや、北壁面で確認した第3層上面の標高から本来は第3層上面が遺構検出面と考えられる。



第3図 調査地区割図



第4図 調査地土層柱状模式図

まず調査区の南東隅において確認した第1・2層は、現代の耕作土とその床土とみられるものである。第3層は、調査区の東半部、北壁際において確認したもので厚さは最大22cmを測る。この第3層の形成時期は遺物がみられないため不明であるが、その上面は弥生時代中期の土坑1基や後期の竪穴住居1棟、古墳時代初頭の竪穴住居4棟のほか土坑や溝などを検出した遺構検出面である。

第4層以下の各土層については、サブトレンチ1において確認したものである。まず第4層は厚さ14~26cmを測るもので、その上面は造成によってかなりの削平を受けて波打つものである。また第5層は調査区の西部半ば以東において確認したもので、上面の標高は2.2~2.3m、厚さは東端部で28cmを測る。次に第6・7層は砂層であり、第6層上面の標高は2.0~2.2mを測る。これら第4層以下の各土層は、西から東へ10~20cmの比高差で低く傾斜するもので遺物は確認できなかった。

#### 4. 遺構

本調査では、第4層上面において弥生時代中期の土坑1基や後期の竪穴住居1棟及びピットのほか不定形な落ち込み(SX-1)、また弥生時代後期末から古墳時代初頭の溝1条、さらに古墳時代初頭の竪穴住居4棟をはじめ溝や土坑及びピットなど多数の遺構を検出した(第6図、図版2の上)。遺構検出面の標高は2.3~2.6mを測る。以下、主な遺構について古い時期のものから説明を行う。

##### (1) 弥生時代の遺構

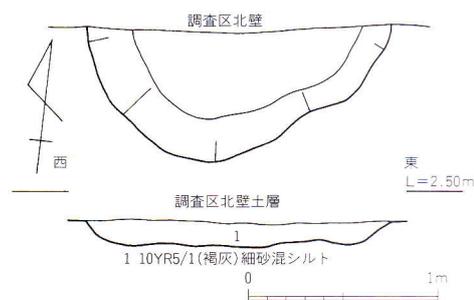
[SK-8] (第5図、図版2の下)

SK-8は、調査区のほぼ中央部、北壁際において検出したもので東西1.6m、南北70cm以上、深さ9~14cmを測る不正円形の土坑と考えられる。覆土は褐灰色細砂混シルトの単一層である。時期については、土坑の東側、調査区北壁際において弥生土器の壺(第13図1)が出土しており弥生時代中期後半のものと考えられる。

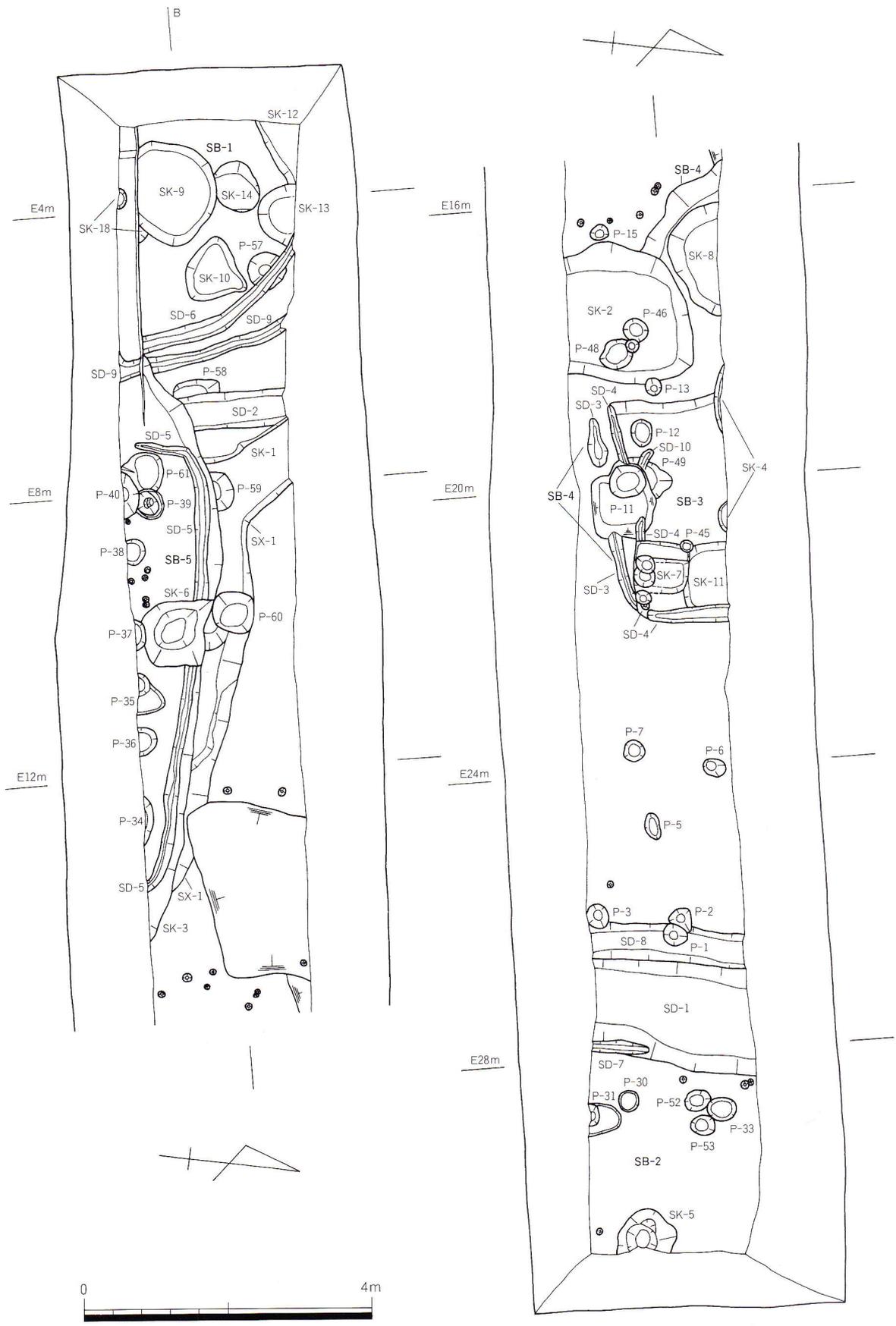
[SB-1] (第7図、図版3・4)

SB-1は、調査区の西端部、SK-1の遺構底面において検出したもので、円形の竪穴住居とみられるものである。この住居は、検出した位置関係や楕円形にめぐる壁溝の方向性などからみて、第6次調査区北端部において検出された竪穴住居と同一住居であると考えられる。第6次調査では、住居の周囲をめぐる壁溝が重複関係をもって2条確認されており、新旧2時期の住居が同一面において検出されている。今回の調査では、調査区南壁面の土層観察によって2時期の床面が存在することを確認した。以下では新段階のものをSB-1a、古段階のものをSB-1bとし説明する。

まず第7次調査区においてSB-1aに伴う遺構には、炭が薄く堆積した土坑(SK-9)や壁溝(SD-6)及び不定形な土坑(SK-10)のほか調査区南壁面において炉(SK-17)を確認した。この炉は、さらに調査区外へと続くため正確な規模は確認できないが、現況において覆土は2単位に分層が可能であり深さは16cmを測る。またSK-9は直径1.3~1.5m、深さ約3cmを測るもので、南に隣接する炉(SK-17)の内部に溜まった炭を住居床面に掻き出した痕跡とみられる。第6次調査においてこのSB



第5図 SK-8遺構平面図及び土層断面図



第6図 遺構全体平面図

-1aに対応する遺構は、その重複関係から壁溝1や柱穴1～4が考えられる。よって平面形態については、長径8.3m、短径7.5mを測るやや楕円形を呈するものとみられ、柱穴1～3が2.1～2.6mの間隔で円弧に並ぶ状況から約10本の柱で支えられた竪穴住居と考えられる。

次にSB-1bに伴う遺構には、覆土に炭を多く含むことから炉とみられる土坑(SK-18)や壁溝(SD-9)のほか、円形及び不定形な土坑(SK-12～14)やピット(P-57)を確認した。これらのうちSK-14は、貯蔵穴とみられるもので長径約70cm、短径約60cm、

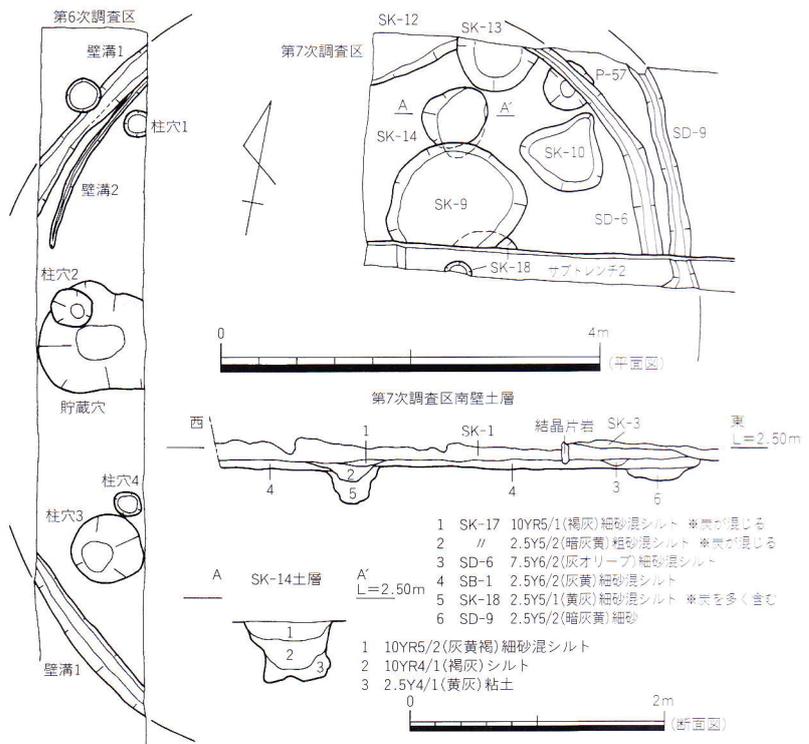
深さ42～48cmを測る。遺構の掘削深は、サブトレンチ1において確認した第7層(砂層)にまでおよぶもので、この第7層は湧水層である。覆土は、3単位に分層が可能であり下層ほど粘性が強くなる。第6次調査においてこのSB-1bに対応する遺構は、壁溝2と貯蔵穴とみられる土坑がある。これらの遺構からSB-1bの平面形態については、SD-9と壁溝2との繋がり具合からみて、SB-1aと長軸を合わせた同規模の楕円形を呈する住居であると考えられる。

これらの住居の特徴は、ともに炉が楕円の中心から北東にずれた位置をそのまま踏襲することである。また壁溝2に対し壁溝1が、SD-9に対しSD-6がそれぞれ西にずれて形成されていることや、調査区南壁面土層を観察した結果からみて、SB-1aはSB-1bの床面に6cmほど貼り床を施し、やや西に寄せて建て替えられた住居と考えられる。これらの住居の時期については弥生時代後期の範疇とみられる。

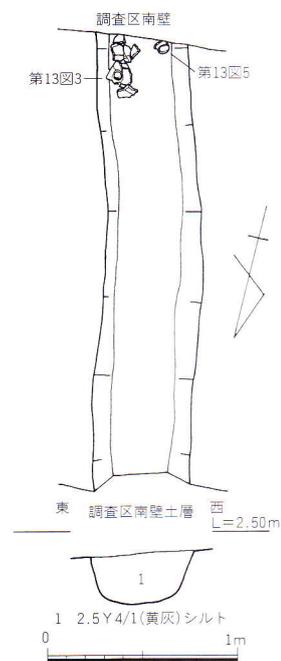
## (2) 弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構

[SD-2] (第8図、図版5)

SD-2は、調査区の西端付近において検出したもので検出長2.4m、幅約50cm、深さ26cmを測り、その方向性はN-14°-Eである。遺構底面は、北から南に向かって約6cmの比高差で低く傾斜している。覆土は黄灰色シルトの単一層である。時期については、溝の南端部において土師器の壺と甕がそれぞれ1点ずつ(第13図3・5)出土しており、弥生時代後期末から古墳時代初頭のものと考えられる。



第7図 SB-1 遺構平面図及び土層断面図

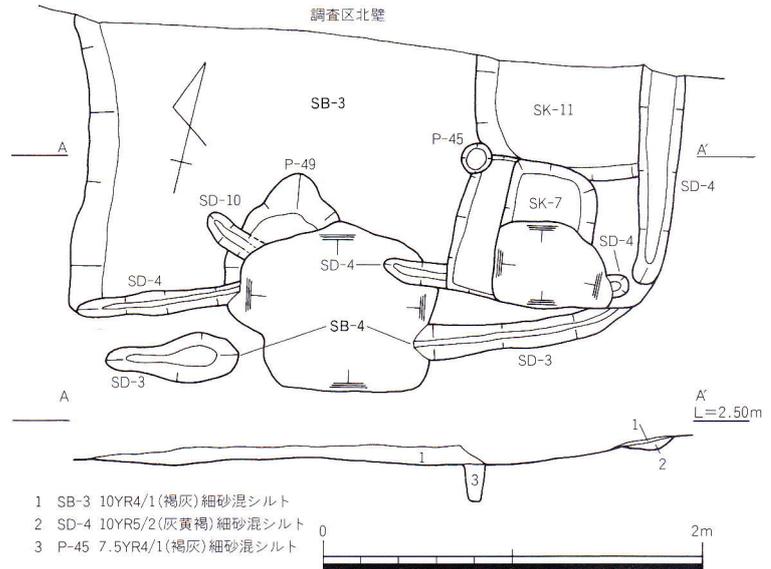


第8図 SD-2 遺構平面図及び土層断面図

### (3) 古墳時代の遺構

[SB-3] (第9図、図版6)

SB-3は、調査区の中央部やや東寄りにおいて検出した方形の竪穴住居とみられるもので、住居の北半部は調査区外へと続くものである。この住居に伴う遺構については、まず東辺と南辺において壁溝(SD-4)を検出した。この壁溝は西辺では認められない。また住居の西辺と南辺は少し内側に湾曲するものであり、南辺の内側には住居内の区画溝と思われる溝(SD



第9図 SB-3 遺構平面図及び土層断面図

-10)がみられる。以上のことから、この住居の平面形態は南辺の距離が約3.0mを測る比較的小規模で歪な方形の竪穴住居と考えられる。さらに、住居の炉や支柱穴については今回の調査範囲では確認できなかったが、南東隅部では壁溝に接して貯蔵穴とみられる土坑(SK-7)を検出した。SK-7は南東部を後世の削平により欠失しているが、西半部を一段高く掘り残した一辺約70cmを測る方形の土坑であり、北西隅部にはピット(P-45)がみられる。深さは西半部で約5cm、東半部で17cmを測る。またこの住居の覆土については、褐灰色の細砂混シルトの単一層で厚さは最大10cmを測る。

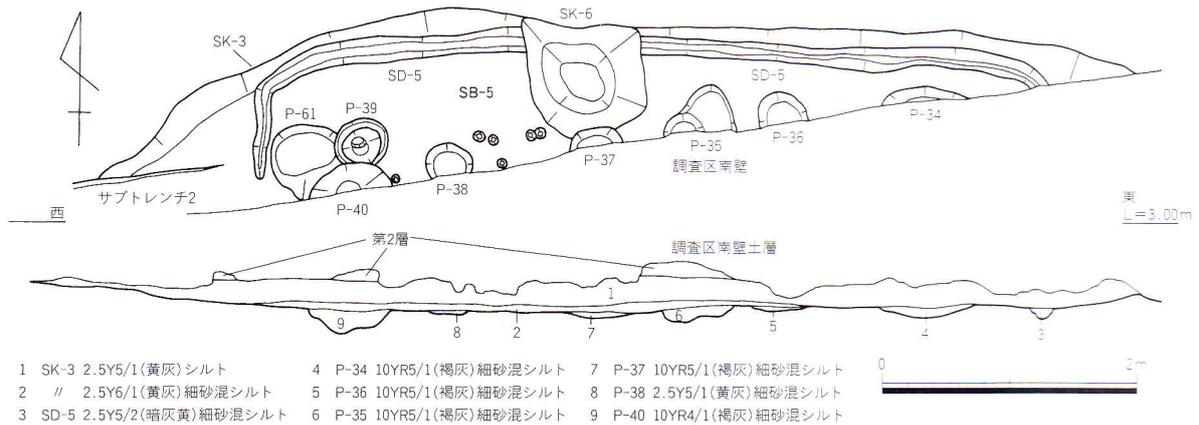
次にSB-3の南辺に沿って検出したSD-3は、住居の壁溝とみられるものである。ただ、この壁溝はSB-3の南壁溝であるSD-4の方向性と比較した場合、若干東西軸がずれているためSB-3に先行する住居(SB-4)に伴う遺構と考えられる。したがってP-49などは、SB-3や後世の攪乱によって削平されているため詳細は不明であるがSB-4に伴う遺構であると思われる。

これらの住居の時期については、SB-3が埋没した後に掘削されたP-11出土土器(第13図6~9)の時期や遺構の重複関係から、SB-3については古墳時代初頭の範疇におさまるものとみられ、SB-4についてはSB-3にやや先行する時期のものと考えられる。

[SB-5] (第10図、図版7)

この住居は、当初調査区の西半部、南壁際において検出幅8.2mを測る土坑(SK-3)として把握したものであるが、底面において土坑の北側ホリカタと並行し、西側において南に屈曲する小溝(SD-5)を検出した。よってSK-3は、方形の竪穴住居のホリカタとその覆土であると考えられることから、SB-5として理解し以下記述することとする。

SB-5の平面形態については、まず住居の北側を画する壁溝(SD-5)を確認した。この壁溝は、西部において南に屈曲するため、この部分が住居の北西隅部と考えられる。またこの壁溝の東部では、調査区南壁との接合部において僅かに南へ屈曲する様相が見て取れる。よって、この部分が住居の北東隅部と考えられる。以上のことからこの住居は、北辺の距離をもとに復元すると一辺6.2mを測る方形の竪穴住居と考えられる。さらに床面ではピット8基(P-34~40・61)を確認したものの、住居の大半が南側の調査区外へと続くため、支柱穴をはじめ炉の有無や位置については不明で



第10図 SB-5 遺構平面図及び土層断面図

ある。ただ住居北壁の中央やや西寄りでは、壁溝に接するように貯蔵穴とみられる土坑(SK-6)を検出した。この貯蔵穴は東西約90cm、南北約90cm、深さ49cmを測り、すり鉢状を呈するものである。

この住居の覆土については、2単位に分層が可能であり、厚さは最大30cmを測る。また時期については、覆土内に含まれる土器から古墳時代初頭の範疇におさまるものと考えられる。

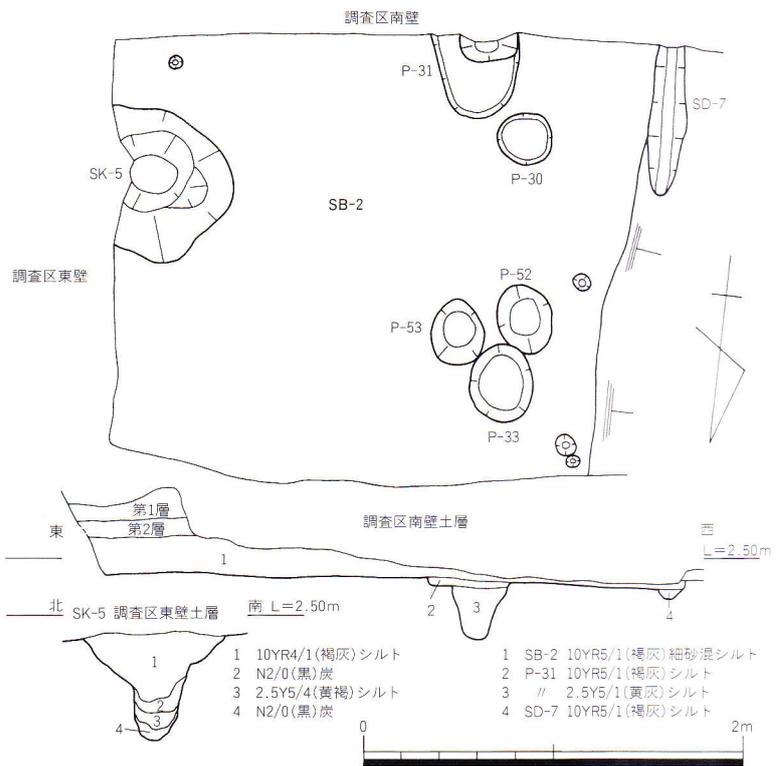
[SB-2] (第11図、図版8)

SB-2は、調査区の東端部において検出した竪穴住居とみられるもので、この住居に伴う遺構としては調査区の東壁際において炉(SK-5)を検出し、南壁際では支柱穴(P-31)とその西側に壁溝(SD-7)がみられるほか、床面ではピット4基(P-30・33・52・53)などを確認した。したがってその平面形態は、炉を住居の中心として反転した場合、炉の中心から壁溝までの距離が約2.7mを測ることから一辺約5.4mの方形の竪穴住居と考えられる。またSK-5は、直径76~90cm、深さ56cmを測るもので、覆土は4単位に分層が可能であり第2層目と炉底面には炭が厚く堆積するものである。

この住居の覆土については、単一層で厚さ約20cmを測る。また時期については、覆土内に含まれる土器や遺構の重複関係から古墳時代初頭のものと考えられる。

[SD-1・8] (第12図、図版9)

SD-1・8は、調査区の東端部付近において検出したもので、ともにその方向性はほぼ南北方向である。調査区南壁面土層を観察した結果、SD-8が埋没した後にSD-1が掘削されている状況を確認した。まずSD-8は検出長2.2m、幅約50cm、深さ42cmを測るもので、



第11図 SB-2 遺構平面図及び土層断面図

遺構底面は北から南に向かって約4cmの比高差で低く傾斜している。覆土は3単位に分層が可能である。また、SD-1は検出長2.3m、幅1.7~1.9m、深さ36~43cmを測り、遺構底面の標高はSD-8とは逆に南から北に向かって11cmの比高差で傾斜するものである。覆土は2単位に分層が可能である。

時期については、出土遺物や遺構の重複関係からSD-1が古墳時代前期とみられ、SD-8はそれよりやや先行する時期のものと考えられる。

## 5. 遺物

遺物は、各時代の遺構覆土や遺物包含層から遺物収納コンテナ7箱分が出土した。

これらの遺物の内容は、弥生時代中期から後期にかけての弥生土器をはじめ、土師器、製塩土器、中世土師器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、石器などがある。今回の調査では、竪穴住居をはじめ溝や土坑など多数の遺構を検出したが遺物の出土量は比較的少量であった。そのなかで特筆すべきものとしては、古墳時代前期に生駒山西麓から持ち運ばれた甕形土器の口縁部があり、小破片ではあるが井辺地域と大阪府南西部との交流を示す重要な資料である(写真1)。そのほか、土器では矢羽状タタキを有する土師器片や土製品では有孔土錘があり、石器では結晶片岩製の石錘及び砂岩製の叩石が出土した。以下、これらの遺物を大きく時代ごとに分類して記述し、遺構出土の一括遺物や遺構形成時期の前後関係を把握するために必要不可欠な遺物については別項を設け説明する。また最後に土製品、石器について個別に記述する。

### (1) 弥生時代の土器

[SK-8 出土土器] (第13図1、図版11)

1は壺であり、底径は11.2cmを測るものである。外面の調整は底部下端に指オサエがみられるほか、体部は原則としてタタキ成形の後タテハケが施され、さらに体部下半から中位にかけてはナナメ方向のヘラミガキを施すものである。また内面には、体部中位や底部付近にナナメ及びヨコ方向のヘラミガキと考えられる条線が多数みられる。胎土には1~3mm大の石英や結晶片岩のほか砂岩が含まれ、色調は黄褐~淡褐色である。また時期については紀伊第IV様式のものと思われる。

[SX-1 出土土器] (第13図2、図版11)

2は甕の底部であり、底径は3.8cmを測るものである。外面の調整には成形段階のタタキが顕著にみられ、底部内面にはクモの巣状のハケメが施されている。胎土には1~5mm大の石英や結晶片岩が含まれ、色調は明褐~黄灰色である。時期については紀伊第V様式のものと思われる。

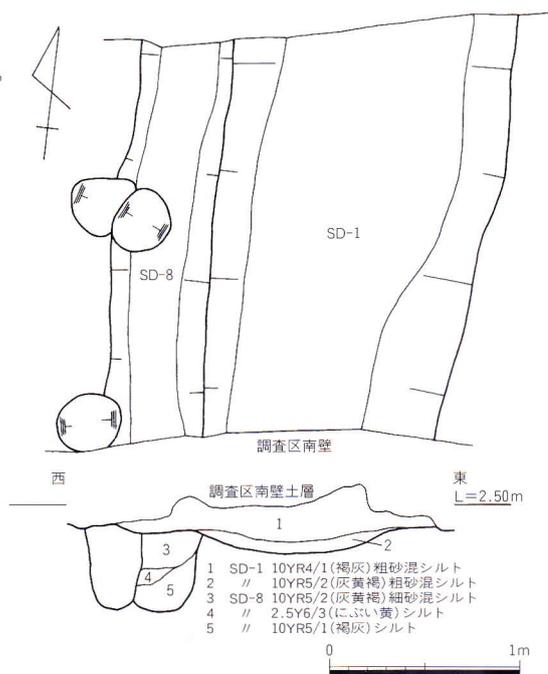


写真1 生駒西麓産の甕

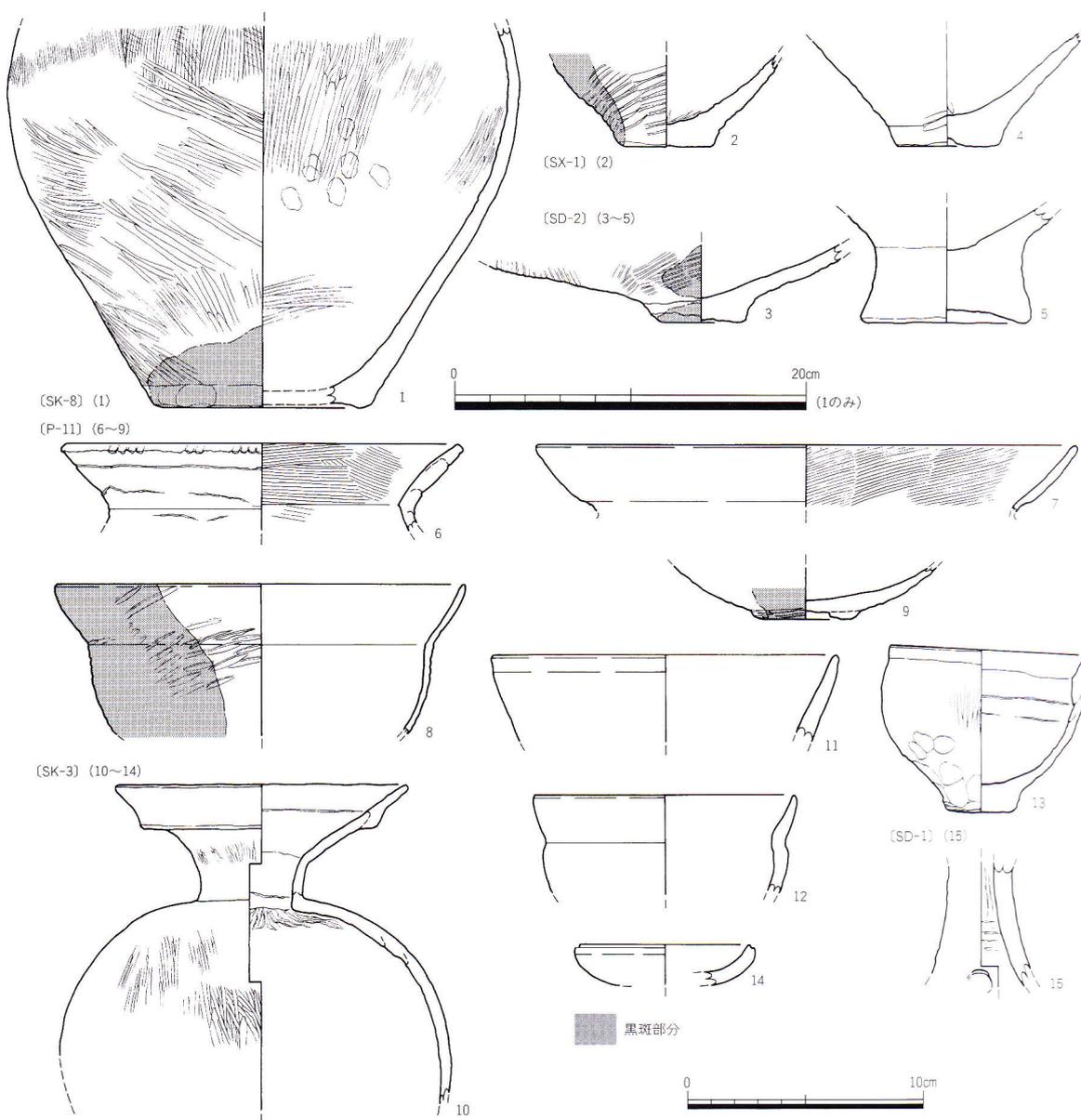
## (2) 弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器

[SD-2 出土土器] (第13図 3~5、図版11)

3は壺の底部であり、底径は3.3cmを測るものである。全体の形状としては、底部から体部下半が斜め横方向に立ち上がることから、体部が比較的球形化する形態のものと考えられる。外面の調整には成形段階のタタキが顕著にみられ、内面の調整には板状工具によるナデが施されている。

4・5は甕の底部である。4は弥生後期形甕とみられるものであり、底径は4.2cmを測る。内外面の調整は、外面底部下端に成形段階のタタキが残存するほかは摩滅によって不明瞭である。5は甕底の厚さが2.5cmを測る重厚感を感じさせるもので、底径は6.8cmを測る。

これらの土器の色調は、3が灰黄褐~明褐色、4が淡褐~明褐色、5が黄灰色であり、胎土にはそれぞれ1~5mm大の石英や結晶片岩を含む。また時期については、庄内式併行期でも古段階に位置付けられる一群とみられる。



第13図 遺物実測図 1

[P-11出土土器] (第13図6～9、図版11・12)

6・7は甕である。6は弥生後期形甕の口縁部とみられるものであり、口径は16.5cmを測る。口縁側端部には刻み目が施されており、外面には粘土紐の接合痕が顕著にみとめられる。また外面の調整には指オサエがみられ、内面にはナナメ方向のハケが施されている。7は口縁部がやや内湾するいわゆる布留系の甕とみられるもので、口径は23.0cmを測る。外面の調整は全面に煤が付着しており不明瞭である。また内面の調整にはナナメ方向のハケが施されている。

8・9は鉢である。8は口縁部がやや内湾しながら斜め上方へ屈曲するもので、口径は17.2cmを測る。内外面の調整は全体的に摩滅しており、外面に成形段階のタタキが部分的に残存しているのみである。9は球形の体部に輪状の粘土紐を貼り付けて底部とするもので、底径は3.8cmを測る。内外面の調整は、外面底部下端に成形段階のタタキが残存するほかは摩滅によって不明瞭である。またこの底部は、色調や胎土及び焼成の状態から8と同一個体の可能性がある。

これらの土器の色調は、6が明褐～灰黄褐色、7が明褐～黒褐色、8・9が明黄褐～灰黄色であり、胎土は7が砂粒をほとんど含まないのに対し、6・8・9には1～4mm大の石英や結晶片岩のほか赤色軟質粒が含まれる。また時期については庄内式併行期でも新段階のものと考えられる。

### (3) 古墳時代前期の土器

[SK-3 出土土器] (第13図10～14、図版12)

10・11は壺である。10は二重口縁壺であり、口径12.3cmを測る。口縁部の形状は、口縁部中位の擬口縁部分において屈曲がみとめられず、粘土を補充し貼り付けることによって稜をもたせるもので斜め上方へ直線的にのびるものである。また体部は、ほぼ球形状を呈する。内外面の調整は摩滅が著しく不明瞭であるものの、外面体部及び頸部には部分的にタテ方向のヘラミガキが施されており、内面頸部付近には絞り目痕が顕著にみとめられる。11は直口壺の口縁部であり、口径は14.6cmを測る。また外面の調整は、不明瞭であるが口縁端部にやや強いヨコ方向のナデが施されている。

12・13は鉢である。12は球形の体部に内湾しながら短く屈曲する口縁部が付くもので、口径は11.0cmを測る。13は完形の小型無頸鉢であり、口径8.3cm、底径2.9cm、器高6.7～7.1cmを測る。内外面の調整は摩滅が著しく不明瞭であるものの、外面底部から体部下半にかけては指オサエがみとめられ、体部上半にはタテ方向のヘラミガキが部分的に残存している。また内面には粘土紐の接合痕が顕著にみられる。

14は小型器台の杯部であり、口径は7.2cmを測るものである。

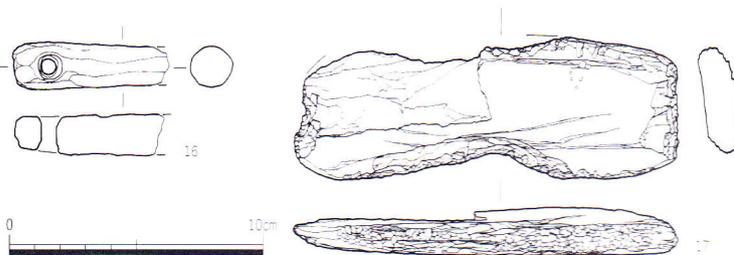
これらの土器の色調は、10が淡灰黄～暗黄褐色、11・12が明褐～黄灰色、13が淡赤褐～黒灰色、14が暗灰黄色である。また胎土には14が砂粒をほとんど含まないのに対し、10～13は1～4mm大の石英や結晶片岩を含む。時期については、布留式併行期でも古段階のものと考えられる。

[SD-1 出土土器] (第13図15、図版12)

15は高杯の脚柱部である。脚部への屈曲部には、2方向に円孔が穿たれている。また内面の調整には、ヨコ方向のヘラケズリが施されており絞り目もみとめられる。色調は黄灰色を呈し、胎土には1～3mm大の石英や結晶片岩が含まれる。時期については布留式併行期とみられる。

#### (4)土製品、石器(第14図、図版12)

16は有孔土錘であり、残存長6.1cm、直径1.6cm、孔径6~9mmを測るものである。胎土には、1~3mm大の石英や結晶片岩が含まれる。



第14図 遺物実測図2

17は結晶片岩製の石錘である。全

長は15.1cm、幅4.2~5.6cm、厚さ最大1.6cmを測り、表面の約1/4を欠損するが重量は220gを量る。全体の形状は、扁平な長方形を呈する板石の長短辺の中央部を敲打によって抉り込み窪ませたものである。また左短辺と右短辺を比較した場合、右短辺の抉りが潰れ平滑になっていることや、下辺の抉り込み部周辺には広い範囲に敲打痕がみとめられる状況から、この石器は石錘として製作された後、叩石として転用されたものと考えられる。色調は淡緑灰色を呈する。

以上の遺物は、16がSK-2第1層、17がSK-3第1層からそれぞれ出土したものである。

## 6. まとめ

今回の調査では、第6次調査に引き続き、井辺遺跡の集落の様相を知る上で重要な遺構や遺物を多数確認することができた。検出した遺構や遺物は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけてのものであり、そのなかでも竪穴住居をはじめとする居住にかかわる遺構群は井辺集落の盛衰を理解する上で貴重な資料と考えられる。ここでは主な遺構の時期的な変遷について、出土遺物や遺構の重複関係をもとに整理し、調査地周辺における井辺集落の様相について述べ、まとめとしたい。

まず、井辺遺跡のこれまでの過去6次にわたる調査では、集落の形成された中心時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭であると考えられてきた。今回の調査においても、竪穴住居をはじめとする多数の遺構の時期はこの範疇におさまるものである。ただ、今回の調査区のほぼ中央部で検出したSK-8は、紀伊第IV様式の弥生土器を伴うもので弥生時代中期後半の土坑と考えられるものである。今回の調査では、弥生時代中期の遺構はこの土坑1基のみであるが、井辺遺跡における集落の形成時期を弥生時代後期末から少し溯らせて考える必要性を示唆する遺構である。これについては、当遺跡の南に隣接する神前遺跡においても弥生時代前期末から中期初頭の水田や中期前半の溝が検出されており、井辺・神前地域の弥生時代集落の出現過程を知る上で注目すべきものである。

そのほかに今回の調査において検出した弥生時代の遺構は、円形の竪穴住居(SB-1)をはじめピット(P-58~60)や不定形な落ち込み(SX-1)など調査区の西半部を中心に展開している。そのなかでSB-1は、井辺遺跡において居住にかかわる遺構が確認された最も古い資料であり、その形成時期については覆土内から出土した遺物のすべてが図示できないほどの小破片であるため詳細は不明であるものの、弥生時代後期の遺物が出土することから当該期を降らないものと考えられる。

次に、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての遺構については、調査区の全面において検出した方形の竪穴住居4棟をはじめとする溝や土坑及びピットがある。これらの遺構は出土遺物やその重複関係から、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけてのいわゆる庄内式併行期のなかでも前後関係がみられる。以下では、出土遺物が比較的まとまって出土した遺構との重複関係を整理する

ことによって、竪穴住居をはじめとする各遺構の前後関係を把握しようと思う。

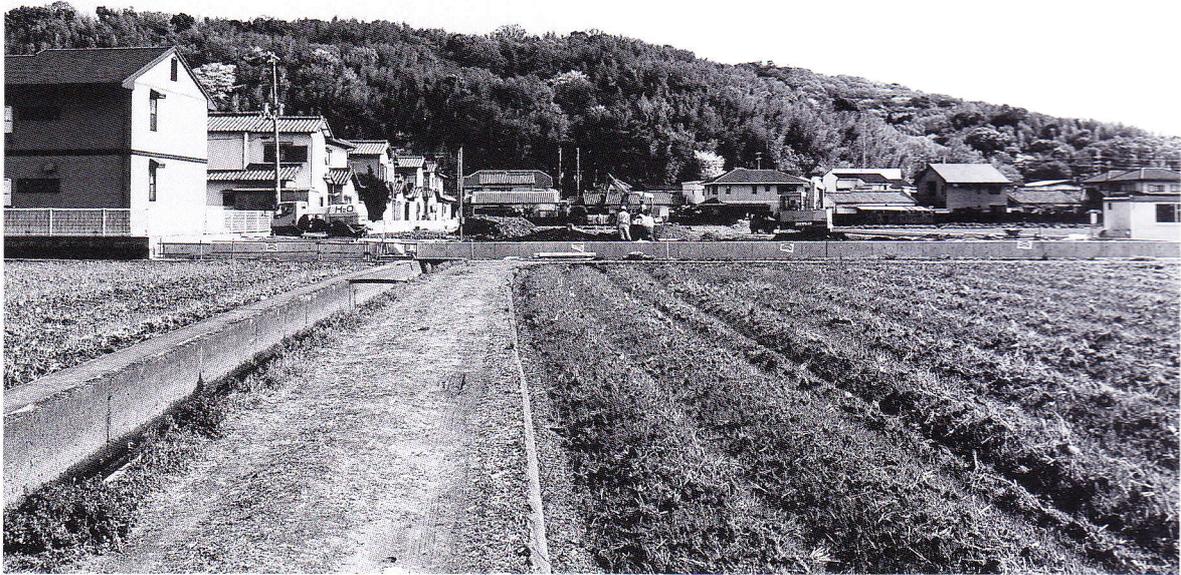
まず、最も古い時期のものとしてはSD-2がある。この溝の形成時期は、覆土内から庄内式併行期古段階の土器が出土することや、各遺構の重複関係からみて弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて機能していたものと考えられる。それに続く遺構としては、SB-3・4が考えられる。SB-3・4は、その埋没後に庄内式併行期新段階の土器を伴うP-11が形成されていることや、その平面形態が方形を呈することから庄内式併行期でも古段階に相当する時期に形成された遺構であると考えられる。SB-3・4に続くものとしては、SB-5を挙げることができる。SB-5は、その覆土と考えられるSK-3に布留式併行期古段階の土器が多数含まれていることから、古墳時代前期には埋没していた可能性がある。よって、SB-5の形成時期としては庄内式併行期の新段階とするのが妥当であると考えられる。さらに、SB-2は布留式併行期の土器を出土したSD-1によって西側部分を削平されていることから、その形成時期についてはSB-5と同様に庄内式併行期の範疇と捉えておくのが妥当であると思われる。上記の各遺構の前後関係を整理すると、SD-2→SB-3・4→SB-2・5(SK-3)、P-11→SD-1となる。

以上、弥生時代中期から古墳時代前期までの様相をみてきたが、弥生時代中期や後期の遺構形成が単発的であるのに対し、弥生時代後期末から古墳時代初頭では継続して遺構が形成されている状況である。このことは、第6次調査において同時期の竪穴住居が3棟検出されていることとも齟齬のない現象であり、井辺遺跡の集落形成の中心時期を弥生時代後期末から古墳時代初頭におくことができるとともに、今回の調査地周辺が当該期集落の中心部である可能性を示唆するものである。

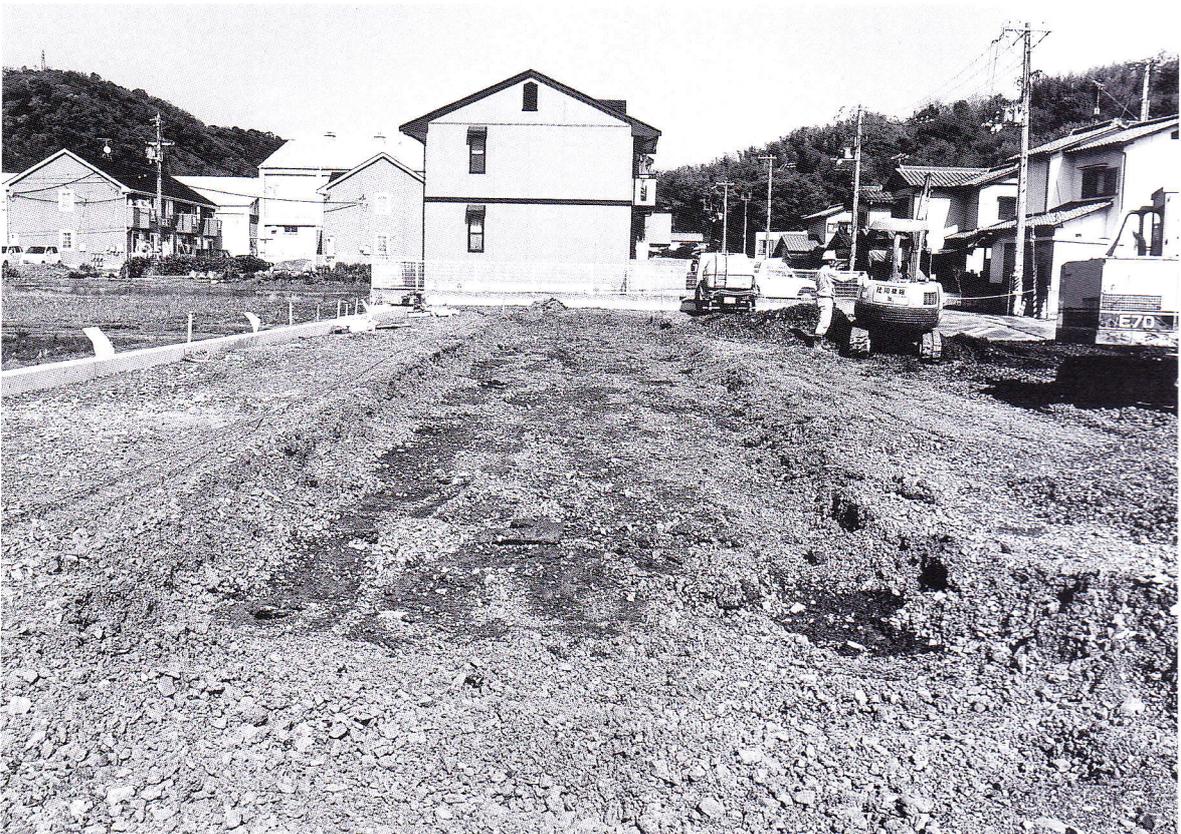
## 報告書抄録

ふりがな	いんべいせきだい7じはくつちょうさがいほう							
書名	井辺遺跡第7次発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人和歌山市文化体育振興事業団調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	藤藪勝則							
編集機関	財団法人和歌山市文化体育振興事業団							
所在地	〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 073-435-1195							
発行年月日	西暦 2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いんべいせき 井辺遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 いんべ 井辺	3020150	308	34° 12′ 59″	135° 12′ 56″	20050414 } 20050512	108	マンションの 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
井辺遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居・溝・ 土坑・ピット	弥生土器・土師器・ 土製品・石器		弥生時代後期から古墳 時代初頭の集落を検出。 旧座標。		
要約	今回の調査では、井辺遺跡の形成時期が弥生時代中期に遡る可能性があることや、集落形成の中心時期は古墳時代初頭であり、集落の中心部は遺跡北東部にある可能性を指摘することができた。							

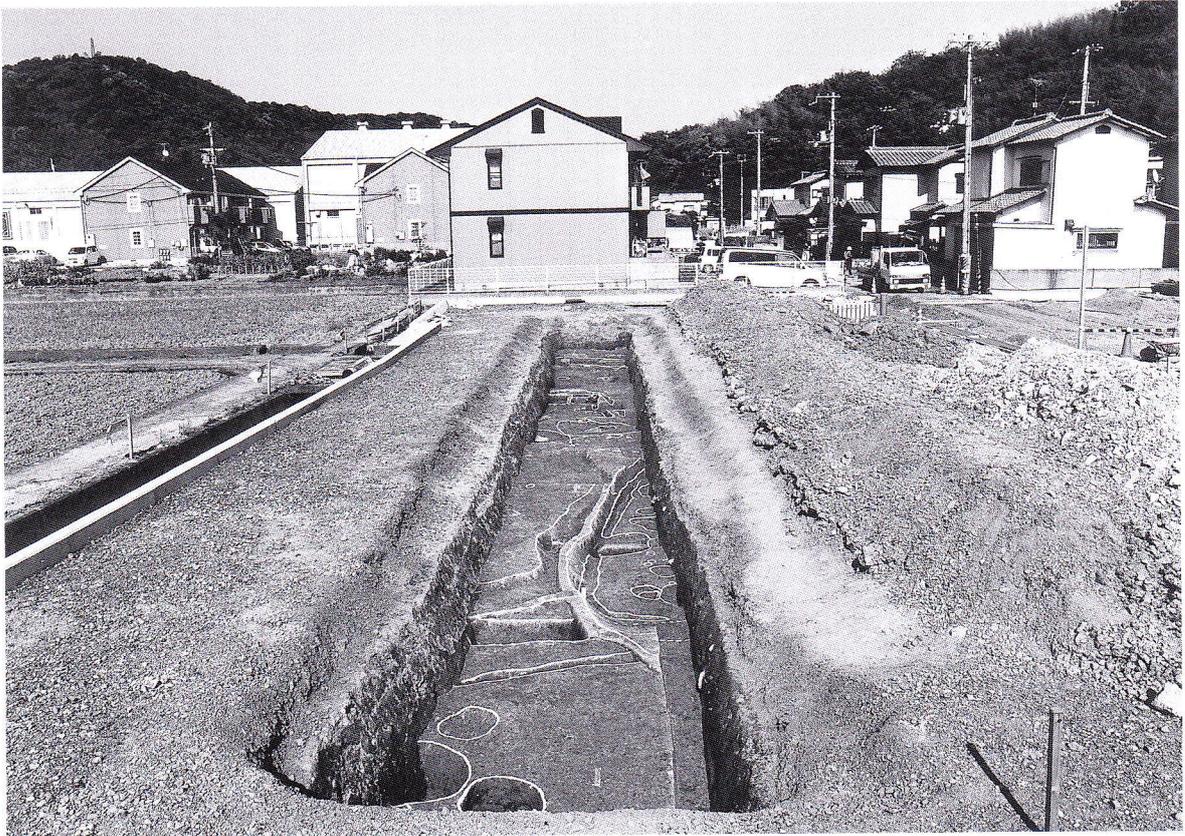
圖 版



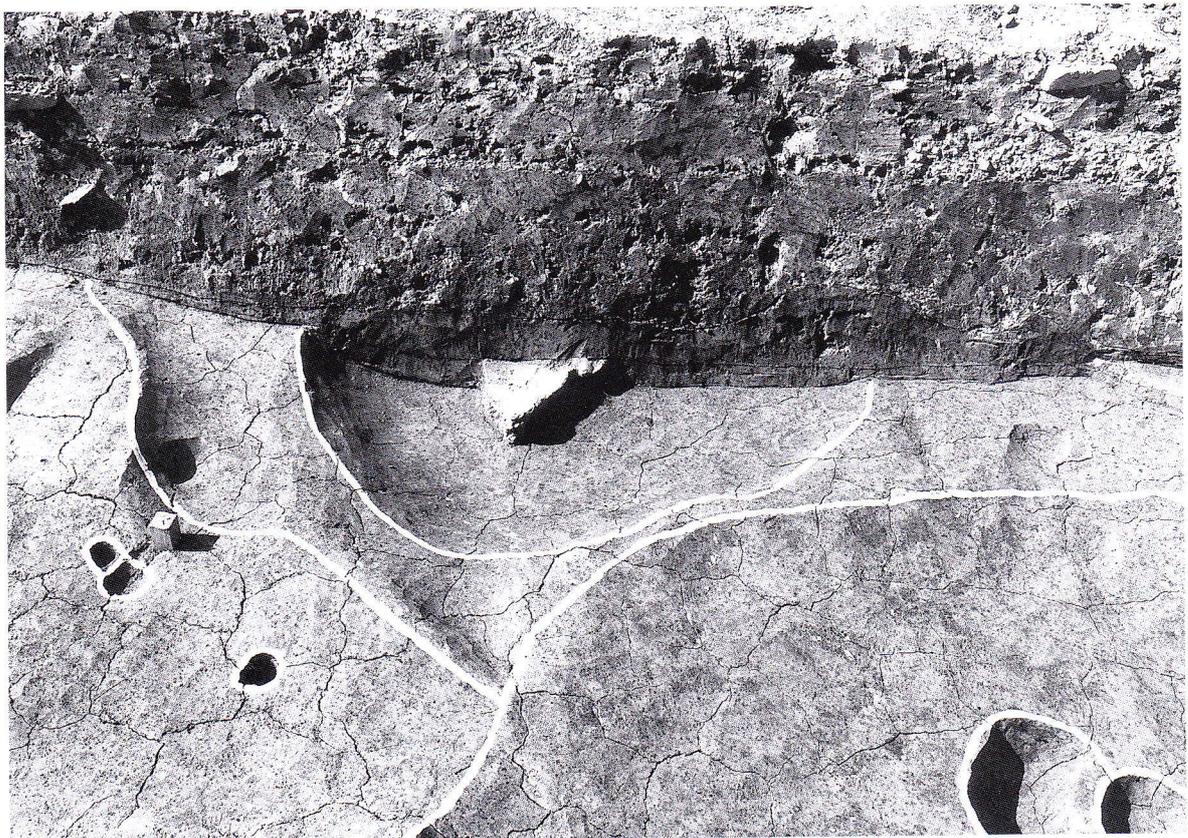
調査地遠景（北から）



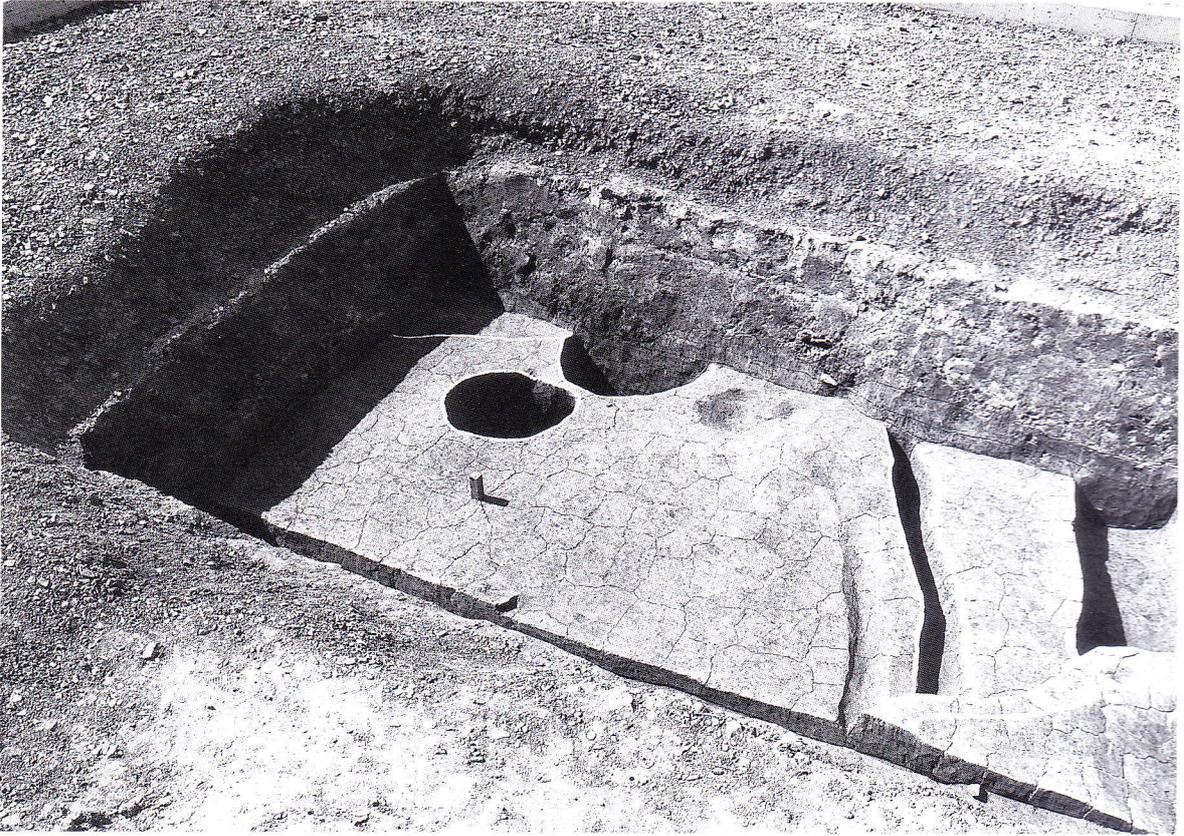
調査前の状況（西から）



調査区全景（西から）



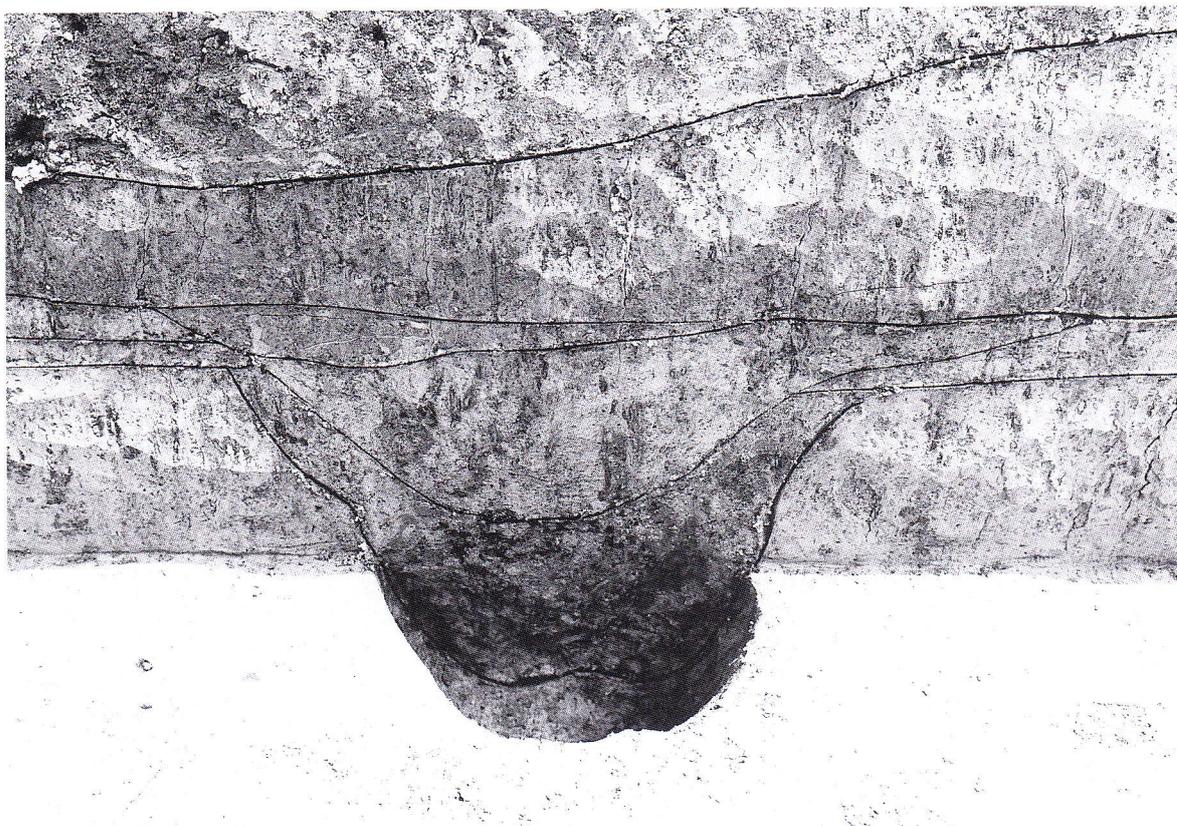
SK-8（南から）



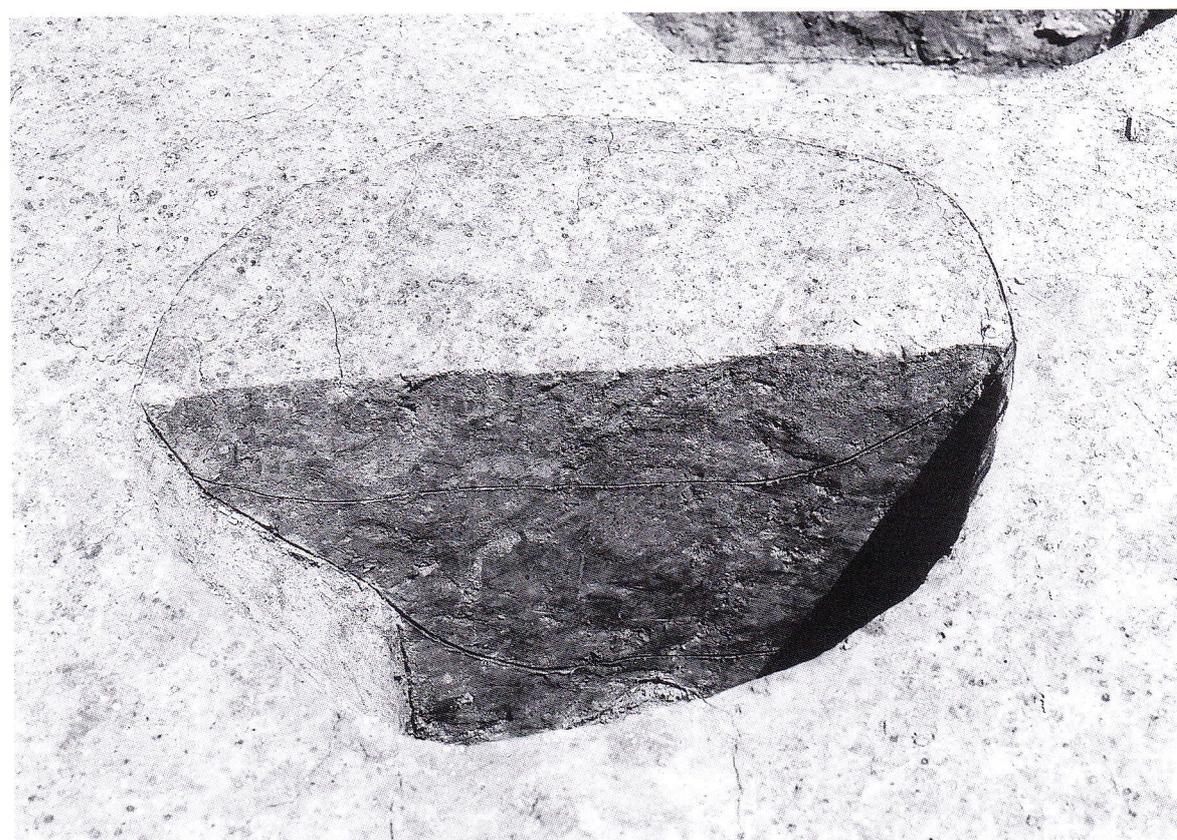
SB-1 b (南東から)



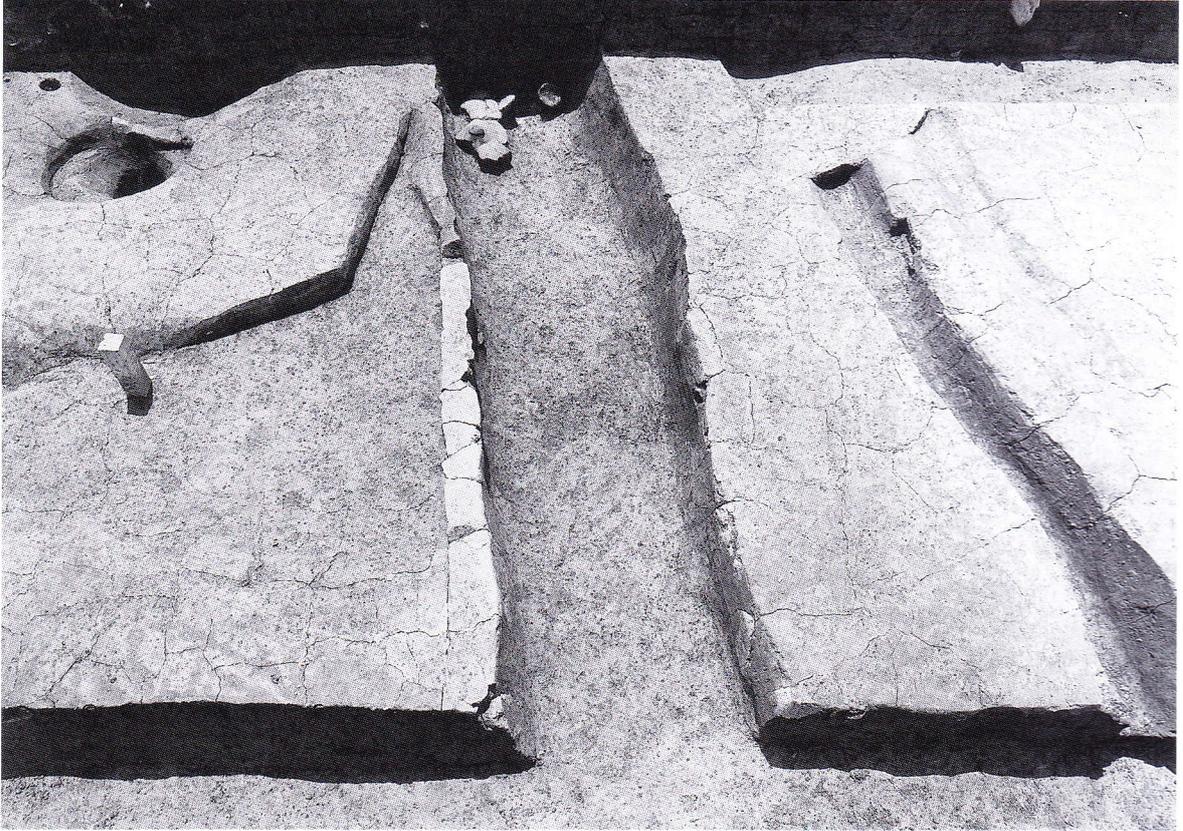
SB-1 a (西から)



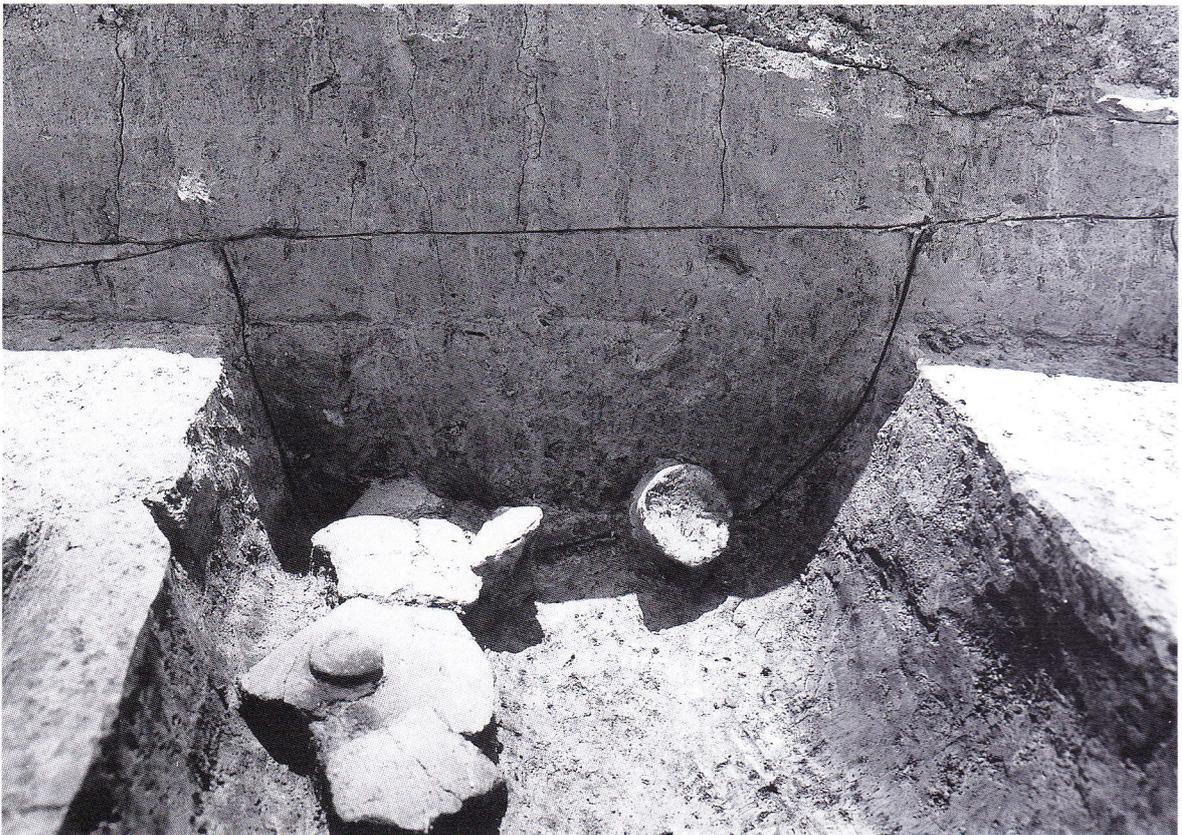
S K - 17 ・ 18 土層堆積状況 (北から)



S K - 14 土層堆積状況 (南から)



S D-2 (北から)



S D-2 土層堆積状況 (北から)



S B - 3 (南から)



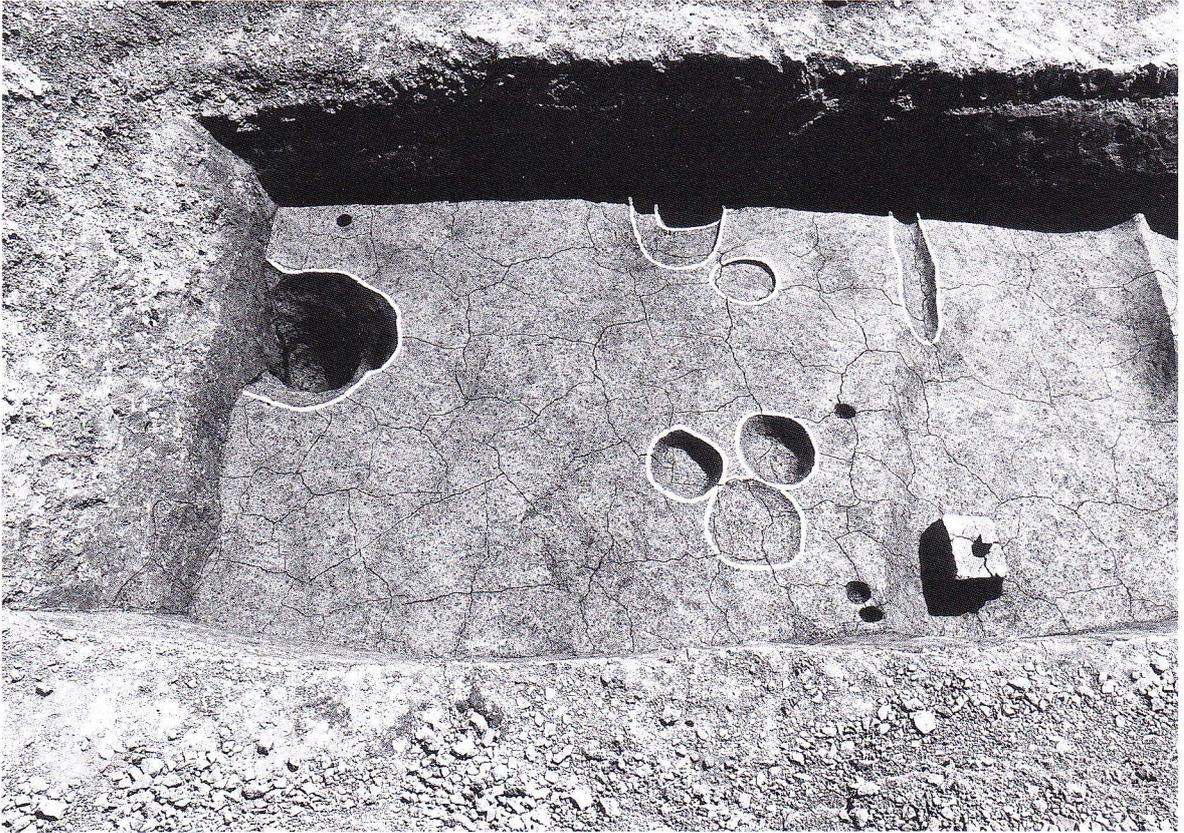
S B - 3 土層堆積状況 (南東から)



SB-5 (西から)



SB-5 (北から)



S B - 2 (北から)



S K - 5 (西から)



SD-1・8 (南西から)



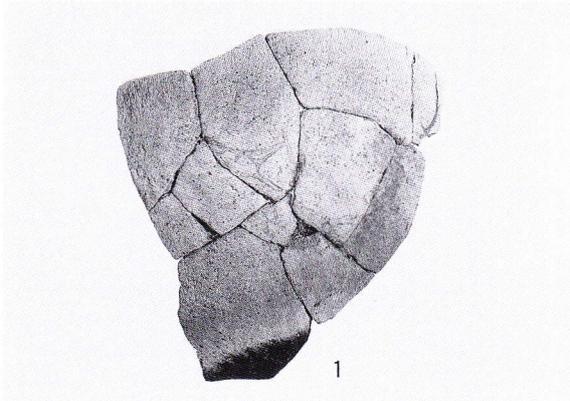
SD-1・8土層堆積状況 (北から)



調査区南壁E 29 m付近土層堆積状況（北から）



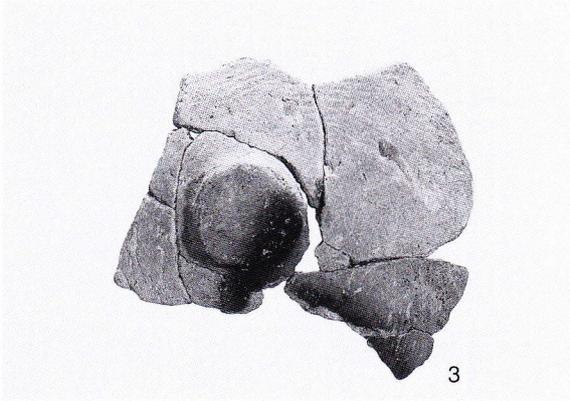
調査区北壁E 22 m付近土層堆積状況（南から）



SK-8 出土土器 弥生土器 1 壺



SX-1 出土土器 弥生土器 2 甕



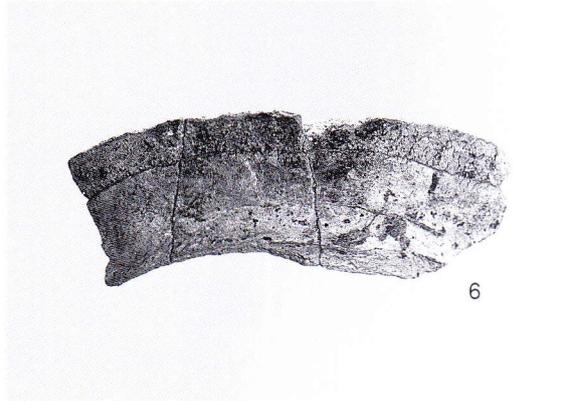
SD-2 出土土器 土師器 3 壺



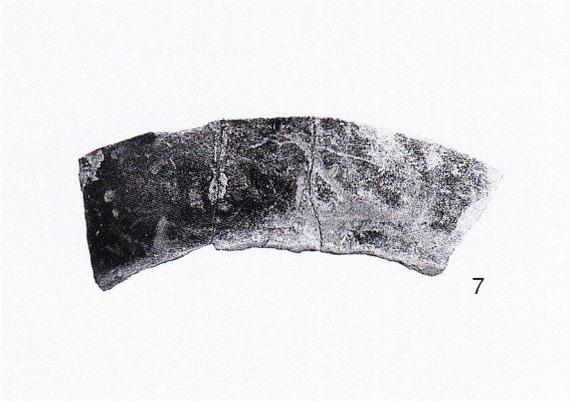
SD-2 出土土器 土師器 4 甕



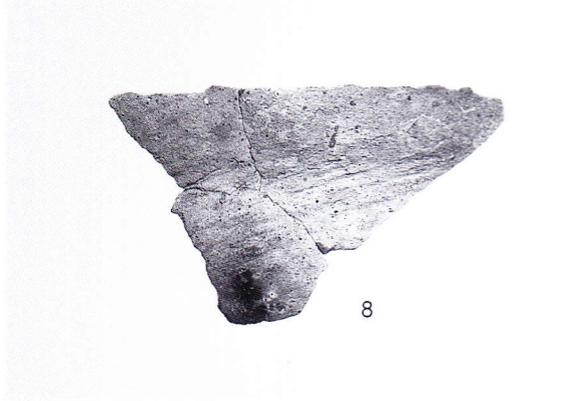
SD-2 出土土器 土師器 5 甕



P-11 出土土器 土師器 6 甕



P-11 出土土器 土師器 7 甕



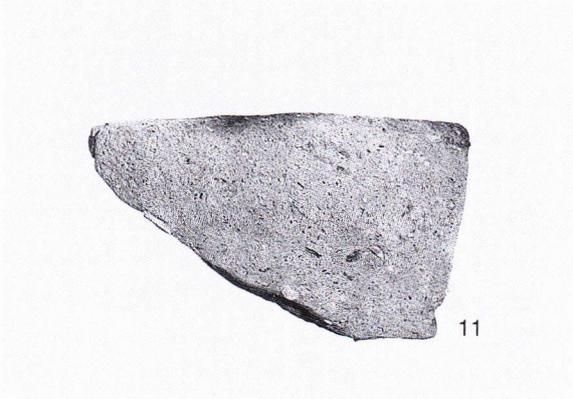
P-11 出土土器 土師器 8 鉢



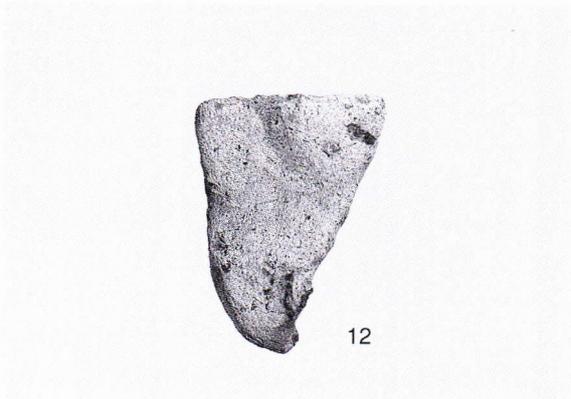
P-11 出土土器 土師器 9 鉢



SK-3 出土土器 土師器 10 壺



SK-3 出土土器 土師器 11 壺



SK-3 出土土器 土師器 12 鉢



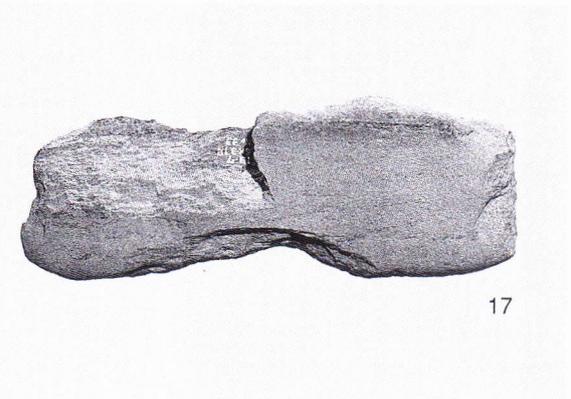
SK-3 出土土器 土師器 13 鉢



SD-1 出土土器 土師器 15 高杯



土製品 16 有孔土錘



石器 17 石錘

平成18年 3月31日発行

井辺遺跡 第7次発掘調査概報

編集・発行 財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 中和印刷紙器株式会社

©財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 2006